

一 一道に生きよ

ぶつぶつ朝から晩まで思うこと、つまらないことばかり、しかしその中に御念仏が出て下さる。お念仏申しつつ思うたことを書きつけて見る。それが難思録である。

「近頃は誰も彼も、人を批判し、非難も攻撃もすることが上手で、自分を省みる人は少くなり、そのくせ困った困ったため息ばかりついています。」とはある教育家の手紙の一節である。人の悪やあらを見つけて言うことは何の用意がなくとも出来る。しかし自己を知ることが教の智慧に照らされないと出来ない。今の日本の国難、苦しみを皆集めて造った程の大きな歎で、己を掘り下げて、その底の流れから出る言葉でないと日本は救われないであろう。昭和の精神革命は難しい。外への力の推進では成就しないから。

宗教のない人にそれは無理はない。御法を聞いてすら「我は悪ろしと思う者一人としてあるべからず。これ聖人の御ばちを蒙りたるすがたなり。」(御一代問書) 自己の罪惡の姿は見えない。見えない心の中から又しても「自己肯定」の我が頭をもたげて人を見下げる。

一口ものをいう。一つの行動をおこす。その底には、必ずその一言一行の依つて立つ場所がある。人と人が同一になれないのは、場所と場所とが同一でないのだ。

生死の苦海ひとりなく、独生独死独去独来とぼとぼと、死出の山路三途の川に向こうが如く、たった一人、家に妻子はあれど兄弟はあれど、無いのがましのけんかだから。たった一人と愚痴をこぼす。十人十色の場所に立つて、十人十色のことを言う。一つになれたらなれた方が違う。

同一念仏無別道故、七月の例会で頂いたが、有り難いこと、有り難いこと。念仏成仏是真宗、その念仏とは同一念仏である。あなたの念仏も本願海から生れ、私の念仏も本願海から出て下さる。私が称えて私にあらす、あなたが申してあなたにあらす、「真に考えるとは場所が考えること、真に語るとは、場所に入るやりかたである」とは哲学の先生の言うこと。そんなことわかりきったことだよ。

「念仏は行者のために非行非善なり」とは七百年昔に教えられたこと。私が念仏して浄土や仏に向かつてあてがうのではない。如来から、浄土から、行ぜられて行ずるのだ。綿入れをぬいだのは私だが、それはそのまま夏がぬいだのだ。それでなかつたらうそのものだ。私が自力の着物をぬぐのがそのまま大慈悲。私が憶念するのがそのまま大悲の憶念。私が行ずるのも思うのも、そのまま功德大実海という親の仕事。みじんも自分のものがないのが真の念仏である。

私の念によつて生きていても、私の念によつて生活が成立つのではない。念ぜられていることを受取ることによつて、念仏生活は成立つのである。仏を見ることは、仏に見られていることを受入れることである。それ故に念仏とは仏念である。

神々と言いなながら神の心を受け入れようとはせず、人間の心に、人間の行動に、神を引き入れようとしたのが大間違いの根本だった。右手に神をつかんで高く掲げな

がら、自分もまた高上りしたところに、大間違ひの根本がある。神の意なんかどうでもよかつたのだ。その証拠には、今日になると神も仏もあるものかと言っているではないか。

ひれふして教えを聞く時、全我の上感ぜられて来るものが大慈悲の仏心である。

何という民族の狂態ぞ、餓鬼道だ畜生道だ。これほど情ない民族だったのか。自由といえばわがまま勝手となり、平等といえば道を無視する。個の尊厳、人格の光、内に重点がなく、光がなく、道がなく、自覚がなくて何の自由であるか、開放であるか。

宗教だ宗教だ。根本的に宗教だ。見えないものに見られていることを感得して独座に襟を正す、我生きるに非ず、如来我にあつて生かし給う。蓮師は「御冥見を恐れよ、はぢよ、喜べよ」といわれた。不滅の聖火を内に点ぜよ。信だ光だ喜びだ。ひれふすことだ。闇のまっただ中に合掌して一道に生きよ。

「念仏ひとつ遠つ仏祖ゆうけつぎて 道一すじに生きんとぞおもう。」